

主に法華經を信じさせまいらせんとをぼしめす御心のふかき故か。阿闍世王は佛の御怨なりしが、耆婆大臣の御すゝめによて、法華經を御信じありて代を持給。妙莊嚴王は二一子の御すゝめによて邪見をひるがへし給。此又しかるべし。貴邊の御すゝめによて今は御心もやわらがせ給てや候らん。此偏に貴邊の法華經の御信心のふかき故也。根ふかければ枝さかへ、源遠ければ流長と申て、一切經は根あさく流ちかく、法華經は根ふかく源とをし、末代惡世までもつきず、さかうべしと、天台大師あそばし給へり。此法門につきし人あまた候しかども、をほやけわたくし(公私)の大難度々重なり候しかば、一年二年こそつき候しが、後々には皆或はをち、或はかへり矢ををる。或は身はをちねども心をち、或は心はをちねども身をちぬ。釋迦佛は淨飯王の嫡子、一閻浮提を知行する事、八萬四千二百一十の大王なり。一閻浮提の諸王頭をかたぶけん上、御内に召つかいし人十萬億人なりしかども、十九の御年、淨飯王宮を出させ給て檀特山に入て十二年。其間御とも(伴)の人五人なり。所謂拘鄰と頰鞞と跋提と十力迦葉、拘利太子となり。此五人も六年と申せしに二人は去ぬ。殘の三人も後の六年にすて奉て去ぬ。但一人殘給てこそ佛にはならせ給しか。法華經は又此に